

# 楷

第四十四号

岡山大学  
附属図書館報  
OKAYAMA UNIVERSITY  
LIBRARY BULLETIN

KAI  
No.44  
2007  
FEBRUARY

<写真>  
つなぎ

「備前国備中国之内領内産物絵図帳」より（岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵）

## 目次

電子ジャーナル時代における資源生物科学研究所分館（史料館）のあり方と意義 （附属図書館資源生物科学研究所分館長 河合富佐子）	p. 2
岡山大学学生と附属図書館長との懇談会（学術情報サービス課）	p. 4
分館所蔵の戦前に朝鮮半島で出版された雑誌について （資源生物科学研究所分館図書係長 川上研三）	p. 7
『自力更生彙報』復刻刊行の意義（ゆまに書房編集部 上條雅通）	p. 8
学術機関リポジトリの形成に向けて（電子情報係長 北條充敏）	p. 9
「池田家文庫絵図展 戦さと城」（学術情報サービス課）	p. 12
「池田家文庫絵図展 戦さと城」の開催を終えて （岡山市デジタルミュージアム学芸員 乗岡実）	p. 13
ワークショップ手法を用いた絵図の活用（その1）（電子情報係長 北條充敏）	p. 15
マスカット	p. 17
海外衛星放送受信設備、データベース講習会、自然史博物館まつり、ほか 会議・研修・編集委員会から	p. 20

# 電子ジャーナル時代における資源生物科学研究所分館(史料館) のあり方と意義 ~貴重文庫の保存とデジタル化~

河合 富佐子

## 1. 電子ジャーナル化と分館

平成 16 年から全学的に開始された岡山大学における電子ジャーナル化は利用可能な学術雑誌数を大幅に増加させ、国際的な研究推進の原動力になっている。反面、図書館のあり方に大きな影響を与えている。資源生物科学研究所(資生研)には学部生が存在しないので、岡山大学附属図書館分館(史料館)の勉学の場としての役割は従来からも比較的小さかった。何故なら、院生は研究室内に自分のデスクを所有しているため、図書館に行く必要性が低い。さらに、電子ジャーナル化のお蔭で雑誌の検索が自分のデスクでできるため、図書館に足を運ぶのはパソコンで利用できない文献の依頼とか、参考書を探しに行く時だけになった。たまには、より静かな場所で集中するために足を運ぶ姿もみかけられるが、利用者はかなり減少している。図書館はあくまでも勉学・研究の要であることに変わりはないが、サービスのあり方を考える時期にきていることは間違いない。分館には大型ポスターのプリンターや研究室セミナーなどに利用可能なスペースがあるので、学部(学科)の資料室や共同利用スペース的な機能も果たしている。また、図書の利用の仕方、文献検索の方法などの教育サポートや文献検索や依頼については、図書館員の強力なサポートが必要で、将来的にもこれらの役割は変わらないだろう。さらに、史料館には下で述べるように貴重書の保存事業が存在し、将来的にはこれらの公開事業や広報活動などの役割も生じるように思われる。

## 2. 貴重書について

史料館は貴重書の所蔵館として科学史研究者などにはよく知られた存在である。最近の事例として、朝鮮総督府農業政策史料全号揃(自力更生彙報 1~88号)は内外ともに史料館だけにしかないことから、ある出版社から史料館のものをコピーした復刻版(10数万円)が100部出版された。100部は全世界の関連研究者数とのことである。同様の例は今後も可能性がある。史料館は起源を1921年に遡り、1914年にスタートした資生研(当時は大原農業研究所)とともに歴史的な価値を有し、日本で有数の貴重文庫を所蔵している。1Fには貴重書の一端が立派な展示ケースに収められて展示されている。また、設立当初の古い計算機、タイプライター、カメラ、顕微鏡などが展示され、壁面には貴重書の中からコピーされた植物の図も飾られている。是非、一見をお勧めしたい。

貴重文庫としては、まず植物生理学者ペッファー教授の蔵書であるペッファー文庫(11,730冊)、中国の明・清時代の農書4,834冊からなる大原漢籍文庫、日本の農書2,576冊を含む大原農書文庫が挙げられる。ペッファー文庫にはパスツールのビール醸造書、マルピーギの論文集、ダーウィンの署名入り自著『The Power of Movement in Plants』などが、また大原農書文庫には、『昆陽漫録』、『豆腐百珍』など興味深いものが含まれている。その他、本物の植物標本と見間違う植物図鑑『Physiotypia Plantarum Austriacarum』も今では再現不可能だろうし、『農政全書』なども貴重な資料だろう。

私の専門は応用微生物学であるので、パスツール(1822-1895)とマルピーギ(1628-1694)について触れたい。パスツールの偉大な業績の一つが微生物の「自然発生説の否定」であることはかな

りの方がご存知だろう。パスツールが微生物に係るようになったのは当時のフランスの代表産業「ワイン」やビールの醸造過程における腐敗防止に関する研究を醸造業者から依頼されたことに始まる。それ以後、微生物を土台に様々な研究を展開し、伝染性の病気が細菌によって引き起こされると考えた。この「病気細菌論」は古今を通じて最大の医学的発見であるとアシモフは『科学技術人名事典』で紹介している。もっとも実際に病原菌を初めて発見したのは、少し遅く生まれたコッホであった。マルピーギは医学者であるが「顕微鏡使用の父」といわれ、顕微鏡下の世界が、望遠鏡が可能にした天文学の世界（当時のトピックス）に劣らず素晴らしいものであることを明らかにした。このことは約200年後のパスツール、コッホによる近代微生物学の確立に繋がったと考えられる。ちなみにレーヴェンフックが初めて細菌の構造を捕らえたのは1683年で「顕微鏡使用の父」の名称をマルピーギと争うことになったといわれる。これがどれくらいのトピックスであったかということは、オランダのデルフトに住むアマチュア科学者に過ぎない彼のもとに英国の女王やオランダ滞在中のロシアのピョートル大帝がお忍びで訪れたという逸話から想像できるだろう。科学史の先駆者の痕跡をみると、時の流れとその延長線上に立っているという感慨をもつ。

### 3. 貴重書の保存とデジタル化の推進

このような貴重書、古書の保存にとって大きな課題は2つある。第一は原本をいかに保存するかということで、パルプや羊皮紙の防虫のため、燻蒸作業が少なくとも10年に1度は必要である。第二に利用を図るためにはデジタル化を進める必要がある。池田家文庫が岡山市デジタルミュージアムで展示されているが（平成18年は10/26～11/12）、貴重書の場合は現物を展示する際に破損や紛失等の危険が常につきまとう。デジタル化ができると、積極的に史料館内外の展示企画や外部への貸し出しがし易くなり、学術・教育情報としての利用が大きく発展すると期待される。史料館では著作権の切れたものから順次作業を開始するため、まずは大原農書、大原漢籍文庫から進めたいと考え、平成20年度の概算要求を提出した。ペッファー文庫は著作権が完全に消滅していないので、もう少し待たなければならない。

研究・教育の基礎になる図書館のupdateと同時に文化としての貴重書を代表とする所蔵物の保存という両輪を逆回りにしないことが史料館に課せられた使命であるので、中央館、鹿田分館と協力して倉敷の地からも岡山大学の発展に貢献していきたい。



『Études sur La Bière』（L. Pasteur, 1876）の標題紙（左）と本文ページ（右）

（かわい・ふさこ 附属図書館資源生物科学研究所分館長）

## 岡山大学学生と附属図書館長との懇談会

日 時：平成 18 年 10 月 11 日（水） 16：00～18：00

場 所：附属図書館大会議室

出席者：稲葉館長 齋藤副館長 大塚鹿田分館長

学 生：細川裕貴（法学部）佐藤ちひろ（法学部）橋本瑞絵（法学部）竹嶋飛鳥（教育学研究科）  
周藤浩太郎（自然科学研究科）奥山清美（環境学研究科）

**稲葉館長**：試験期を除くと学生諸君の図書館への入館数が減少するという図書館にとって大きな課題があります。学生諸君には学習や情報入手の手段として図書館を利用し、自分のレベルを上げて戴きたく思っております。図書館では学生諸君が図書館に来てもらうための工夫を色々考えておりますが、是非とも学生諸君の生の声を聞いて、それらを図書館運営に反映したく思っております。この場では自由に発言して戴ければ幸いです。

**竹嶋**：中央館で平日夜間と日曜日のカウンター業務のアルバイトをしています。カウンターによく申し出があることを紹介します。夏のクーラーの時間が短い、また設定温度が高くなっているため暑くなるので冷房を改善してほしいとの要望があります。特に学習個室はひどいようです。暑くて勉強に集中できないこともあるかと思っておりますので、ご検討の方よろしくお願ひします。今日の配布資料の「図書館利用拡大方策」に記載されていますが、休憩スペースを設置することは良い考えだと思ひます。友達と談笑できる場所があると周りに迷惑をかけなくてすみます。あと、学外からの利用者で学部にある資料を利用したい場合の対応に困っています。平日の学部の教務が開いている時間には来られないといわれます。図書館と学部の連携や学部資料の図書館での取り置きなどはできないのでしょうか。

**稲葉館長**：学生の学習環境を保証する観点からすれば、図書館は冷暖房運転の停止活動から除いたり、設定温度を下げるなど、特別な扱ひが必要かもしれません。できる限り工夫した運営をしたいと思ひます。

**佐藤**：鹿田分館でアルバイトをしています。検索して研究室にあることがわかって、どこに行けば利用させてもらえるのか、わからないので困ります。研究室貸出の場合、自分の経験からしても、利用させていただける先生ばかりではないです。自分の研究費で購入したのだから見せなくてよいといわれたことがあります。複数冊あってどれも研究室貸出という本は、図書館にも1冊は置いてほしいです。

話題になっている本や、漫画でも参考になるものは図書館に置いてほしいです。勉強の合間に読みたいです。鹿田分館には「ブラック・ジャック」や「Dr.コトー」があり、よく利用されています。法学部では「家裁の人」を推薦される先生がおられました。揃えると高いので買えません。「ダヴィンチ・コード」は友だちのあいだで争って読みました。パソコンが1階にしかなく、また狭くて本を広げられないので困ります。資料をみながらレポートを作成できません。

**大塚分館長**：鹿田分館では、学外の方が研究室の図書を利用したいときは、図書館から電話などで連絡してから行ってもらうようにしています。連絡がついても時間外では図書のことがわかる人がいないことが考えられます。

**細川**：中央館でアルバイトをしています。資料室や学科図書室などの利用条件がよくわからない所もあると思うので、わかるものをホームページに作ってもらえるとよいと思ひます。他には、レ

ーザーディスクのコーナーで視ることのできる映画を増やしたらどうでしょうか。今は、過去に賞をとった映画があるようなので、新しい受賞作のビデオ・DVDなどいれたらどうでしょうか。また、図書館内は飲食禁止となっていますが見回りをすると閲覧室で飲食している人を見かけます。閲覧スペースと分けた休憩スペースでは飲食してもよいとしてもいいのではないのでしょうか。それと、鹿田分館では24時間開館となっていますが、どういうものですか。開館延長の希望をよく聞くので、中央館でもしたらどうでしょうか。

**稲葉館長**：学生は24時までの利用ができるということです。21時に施錠し、無人でも学生証を使って24時までの入館ができるようになっています。なお、教員については24時間入館ができるようになっています。中央館で24時間開館を行う場合にどういう設備やどの程度経費が必要となるか等検討してみましよう。

**橋本**：鹿田分館でアルバイトをしています。中央館ではゴミ箱をなくしましたが、消しゴムのカスやティッシュの処分に困っています。試験期で学生が多いときはマナーの悪い利用者が目につきます。大きな声で話したりLDの音漏れがあったりするので、利用者を増やすならマナー向上のポスター掲示などをしてください。雑誌を検索したときに継続の印があったので探しましたが見つかりません。聞いてみると、その後中止したとのことでした。そのような変更は蔵書検索に反映してほしいです。

**稲葉館長**：ゴミ箱の数が多くそれがペットボトルや缶で一杯になり、その片付けのために時間をとられ掃除が行き届かないという状態がありました。ゴミは持ち帰っていただくという社会的な趨勢もあり、ゴミ箱を撤去しました。ご理解ください。学生の入館の多い場合に、学生の駐輪マナーは非常に良くない状況が見られます。駐輪に関して、なにかよいアイデアはないでしょうか。

**奥山**：農学部の例ですが、駐輪場の外側に雑然と駐輪していましたが、ラインをひくとそのラインに沿って整然と置くようになりました。

**周藤**：実験の合い間に資料を探す図書館利用者です。蔵書検索をしたときに同じ物があちこちにちらばっているのはなぜですか。電子ジャーナルで、雑誌によって見える年数が異なっています。他学部の資料室に行くと、コピー設備がないため持ち出してコピーしまた返しに行くこととなります。製本雑誌は重いので不便です。インターネットサービスのSciFinderがなかなかつながりません。

**斎藤副館長**：雑誌の場合、別の学部にあるならうちは購入を止めようといったようなことがありました。長い歴史があることでどうしようもないです。電子ジャーナルについては、予算の範囲で努力した結果です。古いところも見えるように、バックファイルの整備が待たれるところです。SciFinderについては、これもお金の問題です。いまは同時接続3で以前よりよくなっています。時間をずらして使ってみてください。

**奥山**：利用者として思うことは、8時40分に開館していますが、1時間目の授業開始と同じなので授業の前に図書館に行きたい人が行けません。2時間目からの人は9時開館でもそう変わらないので、夜間開館を延長するより朝8時から開館したほうがよいのではないのでしょうか。検索用パソコンが1階と2階にしかなく3階4階に行ってから確認したいこともあるので、上の階にも置いてほしいです。ノートパソコンを持つ学生も多いので、パソコンを持ち込んでインターネットに接続できる環境がほしいです。学習個室が平日は夜8時まで、土・日は使用できないとなっていますが、学生はもっと利用したいようです。友だちと一緒に勉強するのは有意義だと思います。飲食スペースを作るのは賛成です。

カウンターのアルバイトをされていて思うことは、学外の人へのサービスのスタンスが明らかでないように感じます。学外者の貸出では、申込の受付は平日の5時までとか、貸出券は郵送するので待つほしいとか、貸出冊数も2冊と少ないです。学外の利用を制限しているように思えます。

**稲葉館長**：大学図書館では学生の学習に必要とされる図書を買っています。公共図書館とは蔵書内容が異なって当然で、学外の人でも大学図書館機能の範囲での利用をしていただくようにしています。

ひとつおとり発言をしていただきましたが、他にも学生が図書館に気軽に来て戴ける提案があればお話しください。

**細川**：図書館で講義するというのはどうでしょうか。いやいやでも図書館に行くので、図書館のサービスを知る機会が増えると思います。

**斎藤副館長**：10月から、ライブラリーアワーという時間を設定し、図書館に置く特定の図書を課題にその他の図書を参考にして演習することを始めます。図書館に行かないと勉強できない仕組みを作りたいと考えてしました。欧米と異なり日本には図書館で勉強するという習慣がありません。これをなんとかしたいのです。

ライブラリーアワーだけではいけません。学生がとるべき科目数を少なくして1科目あたりの単位を増やす、それに見合う内容の深い授業にする、という大学教育の改革が必要です。

**稲葉館長**：学生がただ図書館に来てくれるのを待つ姿勢から積極的に図書館へ来て戴ける方策を考え、実行したく思っております。岡山大学図書館から学生諸君が図書館を積極的に利用して勉学に励んで戴けるようなきっかけや小さな波を起こし図書館改革につなげていきたいと思っております。今日は皆様のご意見を賜り、大変参考となりました。また、このような場を設けますので、友達を誘って是非とも岡山大学図書館の学生利用への活性化等に関して、意見交換をさせて戴ければと思います。



写真は、懇談会の状況を撮ったものです。

(学術情報サービス課)

# 分館所蔵の戦前に朝鮮半島で出版された雑誌について ～「自力更生彙報」復刻によせて～

川 上 研 三

今回『自力更生彙報』が復刻出版されたように資源生物科学研究所分館には戦前の朝鮮半島で発行された雑誌を多く所蔵しています。図書館のOPACで「朝鮮」の言葉で検索し、戦前に発行されている雑誌をみると、分館だけで44種になります。この数字は同規模の国立大学よりかなり多い数字になります。その中で、全巻を所蔵していると思われる雑誌が6種です。

戦前は民間の農業研究所であった「大原農業研究所」でこのような雑誌を多く所蔵していた要因と考えられるものとして、人的な交流と雑誌の交換があったのではないのでしょうか。

例えば、近藤万太郎所長が当時の文部省から朝鮮に派遣されたり、朝鮮総督府に招聘されたりしており、その後、近藤所長の紹介で研究所所属の職員が朝鮮総督府の機関に就職しています。一方、高橋隆平研究員も朝鮮に渡り、さまざまな品種のオオムギを収集して帰りました。

また、研究所発行雑誌であった『農学研究』・『Berichte des Ohara Instituts für landwirtschaftliche Forschungen』の他機関との寄贈交換を積極的に進めて蔵書の充実を図っていたようです。洋雑誌などでも、珍しい物を多数所蔵しており、交換価値を認められていたことが窺われます。昭和27年（1952）当時の寄贈を受けた雑誌や報告書の数が日本208種、諸外国45カ国800種ということなので、戦前も多く、の国と寄贈交換していたと思われます。

付け加えるとすると、大原美術館のおかげで倉敷が空襲に遭わず焼失や分散を免れたことも、資源生物科学研究所分館が戦前の古い資料を多く所蔵している大きな理由だと思います。

今回復刻された雑誌以外にも『朝鮮農会報』などの貴重な資料がありますので、これを機会に全国の方々に利用していただきたいと思います。



復刻版 2 ページ目「宇垣総督講演の要旨」



復刻版の背表紙（全6巻）

（かわかみ・けんぞう 資源生物科学研究所分館図書係長）

## 『自力更生彙報』復刻刊行の意義

上 條 雅 通

本復刻版を企図したのは、ある若手の研究者との雑談がきっかけだった。韓国になく、日本では1ヶ所だけが揃いで所蔵していること、監修には、同志社大学の板垣竜太先生が適任ということを知った。昨夏、ようやく、資源生物科学研究所へ出向き現物を拝見し、復刻出版までこぎつけた。本書刊行の意義については、板垣先生の「監修のことば」があるので、これを引用する。

「農山漁村振興運動」(通称「農村振興運動」)は、一九三〇年代における朝鮮総督府の重要な農村政策である。一九三一年に朝鮮総督に就任した宇垣一成が、植民地下で進行する農村の疲弊と強まる農民運動を背景として、朝鮮人に「適度のパン」を与えることという基本政策の一環として導入した。一九三三年三月から本格的にスタートし、一九四〇年一〇月に始まった国民総力運動に統合されるまで、約七年半のあいだ続いた。その間、三万以上の村落が「更生指導部落」に指定され、上からの農村の組織化が急速に進展した。

『自力更生彙報』は、この農村振興運動に際して発刊された朝鮮総督府の機関誌である。一九三三年三月に創刊、一九三四年三月からは毎月定期的に刊行され、一九四一年一月の第八八号をもって終刊した。毎号三万部が刷られたとされ、各地域の有力者に配布された。政策の解説、各地の報告、論説など多様な内容が掲載されており、そうした意味でも農村振興運動に関する基本史料である。

のみならず、一九三〇年代の朝鮮における農村および農民の状況、地方での組織化の実態、いわゆる「心田開発」政策などの「啓蒙」事業の位相、朝鮮における農本主義の展開、盧溝橋事件勃発以降における総動員体制構築のプロセスの解明、また日本国内で進められていた農村経済更生運動との比較等においても、重要な意義を有している。

にもかかわらず、本史料は日本や韓国の図書館等では部分的にしか所蔵されておらず、ただ岡山大学資源生物科学研究所(旧・大原農業研究所)でのみ全号が揃っていた。そのため、これまで必ずしも十分に活用されてこなかった。今回の復刊によって、この時期の朝鮮社会の研究が一層進展することを期待する。

板垣竜太

以上であるが、「自力更生運動」の実際と雑誌の内容の一端を、参考のために付しておく。

運動は、〔更生指導部落の選定 農家現況調査の実施(対象農家を選定して調査) 農家更生五年計画の作成 計画の実施〕という手順で進められたが、以下の過程では、調査書や計画表(誌面に掲載)が用意され、指導者や農民自身が、文字や数字を書き込む方式がとられた。

また、指導者として、面長、面書記(面は行政単位) 区長などの末端官公吏、警察官、学校長、金融組合理事などが、縦割り行政の枠をこえて動員されている。さらに、運動の拡充にむけて、住民の中から「中堅人物」を養成するという方策をとり、その養成課程が、誌面に紹介されている。

思想あるいは教育面では、二宮尊徳についての連載記事が長く続き、また、都市や都会人を批判的に扱う都市と農村の比較論など、農本主義的な色の濃い記事にも注目させられるのである。

今回の出版を御許可いただいたことに深く感謝いたします。

(かみじょう・まさみち ゆまに書房編集部)



# 学術機関リポジトリの形成に向けて

## 岡山大学の学術成果と世界を繋ぐ架け橋: eScholarship@OUDIR

### ～岡山大学学術成果リポジトリ for the world～

北 條 充 敏

研究者のみなさんは、自身の研究論文や研究成果をどのようにして、国内・海外の研究者に公開していますか。

例えば、多くの研究者は、出版社や学協会の学術誌に投稿を行っていることと思います。投稿した論文は、査読審査を受けた後、電子ジャーナルとしてはじめて、世界中の研究者の目に触れます。もちろん、論文発表より前に学会発表を行う、特許申請を行う場合もあるかと思えます。

しかし、考えてみてください。研究者は電子ジャーナルから論文を入手することが当たり前のようになった時代において、出版社や学協会から発行される電子ジャーナルは世界中にいる研究者の誰でもが制限なしにアクセスできるわけではありません。一番の問題点として、電子ジャーナルの機関契約や値上りの大きな壁があります。本当に全文までアクセスのできるのは、資金力や電子ジャーナルの購入維持に積極的な機関に所属する研究者に限られるのが実際でしょう。

また、一方、文献検索の中で今注目されているのが、Google や Google Scholar の出現です。これらのツールを使うと、雑誌や文献などが迅速に検索できるのがわかります。Google はインターネット環境があれば誰でもが使えます。利用に関して場所や資金力に左右されないところが一番のメリットです。

世界中の研究者の中には、Web of Science や SCOPUS などの有償データベースを使われる人もいれば、Pubmed / OAIster などの無償検索サービスを使う研究者もいます。

そこで、注目を浴びているのが、「オープンアクセス・ジャーナル」と「機関リポジトリ」です。前者の「オープンアクセス・ジャーナル」は、無償アクセスを前提としたジャーナルを編集・発行するという運動であり、岡山大学医学部の発行する「Acta Medica Okayama」や理学部数学科の発行する「Mathematical Journal of Okayama University」はこの範疇に入るといえます。もう一つの大きな盛り上がりがあるのが、「機関リポジトリ」であり、岡山大学では「eScholarship@OUDIR」という名称のデータベースを立ち上げています。

学内の研究者の皆さんは、図書館がサービスする“eScholarship@OUDIR”をご存知でしょうか。“OUDIR”とは、“Okayama University Digital Information Repository”の頭文字をとった略称です。岡山大学で研究された英文で書かれた査読論文等を中心に登録して、岡山大学の研究者と国内外の研究者（同じ研究テーマを持った研究者、岡山大学の研究成果に興味をもたれた研究者）との架け橋になることを目的としています。本稿では、研究者の皆さんに“eScholarship@OUDIR”の特徴について理解してもらいたいと思います。

(研究者を呼び込むための工夫)

eScholarship@OUDIR は、ユーザとなる海外の研究者に理解されないと意味がないと考え、英

語インターフェースしかありません。日本語インターフェースは作る予定はありません(図1)。今や Google / Google Scholar は文献検索ツールの一つとなっています。フォントを埋め込んだ形式の PDF (Word や TeX から Acrobat で変換した PDF) の場合、全文検索できるので、検索ランキングを高順位に表示できます。Google 世代の研究者が増加している中で、論文にアクセスされやすくなります(図2)。

インターネットにアクセスできる環境のある研究者であれば、誰でもどこでも全文(著作権者の許諾がある場合は Publisher/PDF)までアクセスできます。

Google / Google Scholar / Yahoo などの検索エンジンにインデクシングされます。OAster (University of Michigan, US) / AVANO (Marine and Biology Harvesting Service, France) / Scientific Commons (University of St. Gallen, Switzerland) / Proquest Repository / bePress ResearchNow などの他機関が運用する検索サービスからハーベストされます。海外研究者にとって、利用頻度の高い検索サービスを通じて、論文にアクセスされる確率が高くなります。

#### (著作者の関心を呼ぶための工夫)

すべての論文等は、レコード単位に固有の URL を所有します。個人ページから eScholarship 上のレコードへのリンクを認めています。

すべての論文等は、Publisher/PDF または HTML にリンクしてあります。また、掲載誌名や巻号・ページ数、著作権者を記述しています。1993 年以降の Web of Science 収録論文は、Web of Science のダイレクトリンクも設けました。

登録した論文等の、全文ダウンロード数を累計で表示します。

一日あたりのダウンロード数の多い論文のランキングを表示します。

どのドメインからのアクセスが多いかを知ることができます(管理者機能)。

#### (登録申請の簡素化ための工夫)

次に、具体的にどのようにすれば登録申請できるかについて案内します。eScholarship@OUDIR に登録できるユーザは、本学の教職員、学生等です。英文の査読論文等であれば、著者所属に“岡山大学”や“Okayama University”と表記のあるものは全て対象となります。もちろん、ある著者が過去に岡山大学に在籍・留学して、岡山大学時代に書かれた論文等も登録対象となります。

登録申請の方法は、極めて簡単です。著者最終原稿を添付した電子メールを、oudir@lib.okayama-u.ac.jp 宛に送付してください。図書館のリポジトリ担当者は、添付されている原稿を開いて、出版社/PDF を送っていないか、出版社・学協会等の著作権許諾状況を確認した上で、なるべく早急に eScholarship@OUDIR に登録を行います。eScholarship@OUDIR に登録されると、システムが自動的に英文の確認メールを申請者に送信します。

さて本稿を見て、自身の論文や研究成果を登録したいと思われた方は、まずは oudir@lib.okayama-u.ac.jp にご相談ください。

また、今後の計画として、何かと忙しいけれど、“eScholarship@OUDIR”について知りたいという研究者のために、“15分でわかる個別プレゼンテーション(予約制)”や“研究室への論文受取りサービス”も平成19年度には始めますのでご利用ください。また、4月からの新しい若手研究者や大学院生へのオリエンテーションをお考えの方がいましたら、‘eScholarship@OUDIR’の有用性に

ついでご紹介いたしますのでご相談ください。

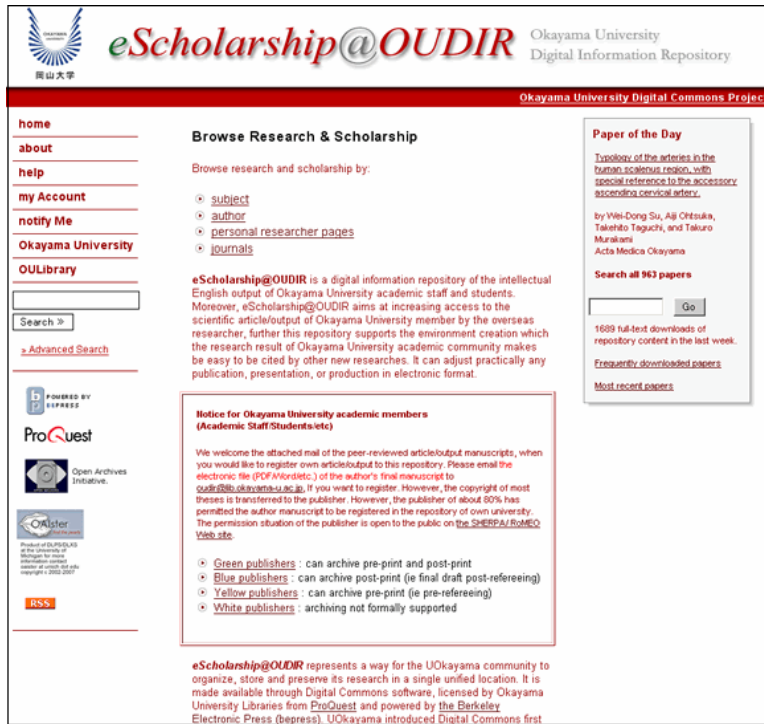


図 1



図 2

(ほうじょう・みつとし 電子情報係長)

# 「池田家文庫絵図展 いく 戦しろさと城」

## 学術情報サービス課

昨年度に引き続き、岡山市デジタルミュージアム4階企画展示室で開催しました展示会は、6,878人もの方々にご来場いただきました。展示会の様子は、次頁の乗岡氏の記事におまかせして、ここでは、2,352人の方々にご協力いただきましたアンケートについて、報告します。

テーマ : 戦さと城

期間 : 平成18年10月26日(木)～11月12日(日) 10:00～18:00

<来場者アンケート>

年令

0～10才代 7.2% 20才代 11% 30才代 11.6% 40才代 14.3%

50才代 19.8% 60才代以降 35.9% 無回答 0.2%

どこからこられましたか

岡山市内 54.1% 岡山県内 33.1% 県外 12.8%

来場の情報源(複数回答)

新聞・雑誌・TV 25.5% ポスター 21.9% 口コミ 10.2% その他 42.4%

(その他の内訳: 通りがかり、たまたま来たら、大学の案内・広報、講義等)

来場理由(複数回答)

内容に興味 40% 通りがかり 38.1% 周辺に来た 12% 知人に誘われて 5.4%

その他 4.5% (その他内訳: 授業、デジタルミュージアムに来て、旅行のついで等)

展示内容

良い 56.5% 普通 32.7% 物足りない 3.5% 無回答 7.3%

解説内容

易しい 13.3% 適当 58.5% 難しい 6.6% 無回答 21.6%

その他意見など

○資料に書いてある字がよくわからなかった。口語訳が欲しい。

○パソコンで拡大できるのが良かった。全点が拡大できるとよかった。

○模型が面白かった。

○時系列のわかる年表等があったら、よりわかりやすかった。

○会場が暗くて、老年には少し見づらかった。

○絵図だけでなく写真パネルもあり、わかり易かった。

「戦さ」がテーマだったためか、「なかよしが一番」という感想をいただきました。全体的には、今後もぜひ続けて欲しいとのご意見を皆様からいただいています。

# 「池田家文庫絵図展 <sup>いく</sup> 戦<sup>しろ</sup>と城」の開催を終えて

乗 岡 実

## 概要と来場者

今年度の池田家文庫絵図展は平成18年10月26日から11月12日まで、岡山駅西口にある岡山市デジタルミュージアム（以下 博物館）で開催された。これは、平成17年2月に岡山大学と岡山市の間で交された文化事業協力協定に基づくもので、絵図を所蔵する岡山大学附属図書館（以下 図書館）から博物館に会場を移しての絵図展としては昨年が続いて二回目である。展示面積は昨年より増やして4階展示室全体を使った展覧会となった。

実質16日に及ぶ期間のうちに6,878人も来場者があり、昨年の「江戸時代の岡山 - 池田家文庫絵図名品展 - 」の3,312人を大幅に上回った。岡山大学と岡山市が互いの特性を生かした役割分担を行って相乗効果を生み出すことにより、多くの方々に、池田家文庫絵図の素晴らしさを知っていただき、また絵図を通じて学びを深めていただくという所期の目的を大いに果たせたといえよう。

おりしも博物館に取付く岡山駅東西連絡通路が完成し、アクセスがいっそう便利になったことも幸いしている。入場無料と合わせて、付近の掲示を見て興味をもち、気軽に入場いただいた方も多かった。駅前立地の利便性に加えて、会期中には全国図書館大会や全国歴史資料保存利用機関連絡協議会をはじめとした全国大会が岡山市内であり、その参加者に組織的に観覧を呼びかけたこともあって、入場者は岡山市在住の方を主体としつつも、県内各地から近隣各県、さらには東京など遠隔地からの方も目立った。

展覧会の全体構成と監修、会場で配布した12頁からなるパンフレットの原稿執筆などは岡山大学文学部の倉地克直教授にご担当いただき、博物館の学芸員はパネル・キャプション作製や関連資料の手配、展示の実務などを担当した。事務的な準備作業、会場受付や監視、ワークショップや講演会の運営などは、図書館と博物館の職員が適宜分担して行った。また、展示作業には実習を兼ねて岡山大学文学部日本史研究室の学生さんにも一翼を担っていただいたし、会場監視の一部には博物館のボランティアスタッフである市民学芸員の方にも加わっていただいた。大学と自治体に関わる人々が正に一丸となって行った展覧会である。

## 展覧会の内容

展示した池田家文庫資料は40点で、うち絵図は29点あった。主体は合戦時の両軍の武将の配置を、地形や城との関係で示した陣形図である。多くが鮮やかに彩色され、最大は縦124cm、横191cmの「関ヶ原合戦之図」、あるいは縦156cm、横159cmの「島原戦地之図」である。縦横いずれかが100cmを超える絵図は全部で8点あった。大形絵図の実物は小さな写真で見るとは違って迫力がある。これらを天井高が4.5mある博物館ならではの十分な高さをもった壁面ケースに展示した。

池田家文庫資料の残りの11点は合戦に関わる文書類である。最も注目を集めたのは織田信長の行動をまとめた「信長記」で国の重要文化財に指定されている。教科書にも登場する信長の「天下布武」印や徳川家康の花押のある書状なども話題となった。

関連資料も数多く展示した。池田家文庫史料は超一級資料であるが、地図的な絵図だけでは、ど

うしても平板になってしまうからである。多くは写真パネルであるが、一番は合戦の様子をビジュアルに描いた屏風絵である。「関ヶ原合戦図屏風」(大阪歴史博物館蔵)「大坂夏の陣図屏風」(大阪城天守閣蔵)「川中島合戦図屏風」(和歌山県立博物館蔵)について、原典資料の所蔵者などのご協力を得て展示できた。加えて古戦場や城の写真パネルを約60点展示した。姉川合戦の古戦場や続いて落城する浅井氏の小谷城、小牧合戦の舞台で池田氏の元の居城でもあった犬山城、関ヶ原合戦時の小早川秀秋や徳川家康の陣所、島原の乱の舞台となった原城といった具合である。大坂冬の陣後の講和で埋められた大坂城の堀の発掘写真などもあった。さらに、関ヶ原合戦にまつわる池田氏の縁起物とみられる法螺貝をデザインした鬼瓦の実物なども展示した。

池田氏は織田信長の家臣として、姉川合戦、長篠合戦などで功績を上げて大名として成長し、次に豊臣秀吉に仕え、小牧長久手合戦では苦杯を味わったが、したいに徳川家康と関係が深くなった。関ヶ原合戦のなかでも前段戦の岐阜城攻めの功績を認められて播磨ほかを領有する大大名となり、豊臣家滅亡をもたらされた大坂の陣を経て、岡山と鳥取に落ち着く事になる。その矢先に起こった島原の乱には参戦しなかったが、調査のため家臣を現地に派遣した。展示では、そうした池田家が関わった合戦を年代順に追い、各コーナーごとに絵図・文書・写真パネルなどを互いに関連づけた。また、中間に備前領内の地誌として描かれた古城図、池田家が参戦していないが軍学のために作られた川中島合戦などの陣形図や諸国の城郭図のコーナーを挟み込んだ。

出口付近には、図書館からパソコン数台を持ち込んでいただき、デジタルコーナーを設けた。ここでは、岡山大学が長年行ってきた絵図のデジタル化の成果を活かし、実物展示中の絵図の5点について、パソコンの画面上で自由に拡大縮小、スクロールして見ることができる。実物展示は実物ならではの良さが伝わるが、資料保護のため照明を落としてある事に加えて、小さな字を読むには無理がある来館者の目から離れた位置にしか展示できない。したがって、相互補完的に実物とデジタルを組み合わせた展示は、絵図を楽しむ上で極めて効果的であった。デジタル画像で細部を見極め、確認のため再び実物を見に戻る人の姿もあった。

特別コーナーでは、デジタルデータから作成した絵図の軸装複製品も展示した。「戦さと城」とは離れる国絵図や岡山城下町絵図であるが、これら地元岡山に直結した絵図について、教材としての活用の途を知ってもらおうという狙いである。絵図の実物は資料保存の観点から、子どもの手に触れる教室に貸し出せないが、複製品なら可能となる。その他、城に関連してミュージアムグッズとして開発中の岡山城天守のペーパークラフトなども展示した。

## 関連行事

初日の10月26日の午前中は、展示室内で子ども向けに「高松城水攻めワークショップ」を開催した。床に敷いた高松城周辺の巨大航空写真、大形ディスプレイに投影した映像紙芝居、ワークシートなどを素材に、岡山市内で日本史の節目となった合戦があったこと、地形との関係での水攻めのメカニズム、各武将の陣地の位置などを親子で学ぶという企画である。歴史に熱心で水攻めを地域学習に活用されている小学校の先生が多くの生徒を連れて参加して下さったり、ほほえましい親子の会話のシーンもみられた。

また同日の午後は茨城大学の高橋修教授の講演会を開催した。展示室横にある講義室の80ほどある座席は満席となり、長久手合戦図屏風を素材に、池田恒興・之助親子の登場場面なども紹介しつつ、合戦図屏風の見どころや歴史的な意味を判りやすく、また楽しくお話いただいた。

(のりおか・みのもる 岡山市デジタルミュージアム学芸員)

# ワークショップ手法を用いた絵図の活用（その1）

北 條 充 敏

みなさんは、「ワークショップ」というものをご存知ですか。最近、日本全国のまちやむらのあちらこちらで、住民参加型のワークショップという手法を用いた取り組みを、広報誌、掲示板、行政・NPOのウェブサイトなどでよく目にします。昔からの話し合いによる解決だけではなく、実施に自ら参加・体験することで、話し合いだけの問題意識よりも深い観点で、人と人の触れ合いや意見交換を感じながら、全体としての意見をとりまとめるという点が、インターネット時代の現代に受け入れられています。

私自身、岩波新書「ワークショップ：新しい学びと創造の場」（中野民夫著 岩波書店，2001）という本を読んでみました。本によると、ワークショップの手法というものは、アメリカ先住民であるアメリカインディアンの集まりがルーツであり、参加者がお互いの意見を認め合うなどのルールのもとで、問題解決を行ったところにあります。また、この手法の可能性の高さやテクニックの多様性を知ることが出来ました。環境、教育、学術会議、アート、人づくり、職場づくり、コミュニケーションの形成など他分野に適応できることから、この手法を用いれば、岡山大学附属図書館で行っている貴重資料の教育普及活動にも応用できるのではないかと思いました。つまり、子どもたちにとって難しい絵図の世界も、家族や友人と和気藹々とした雰囲気の中で、楽しくかつ興味をもって、岡山の歴史や文化を学習できるのではないかと気づかされました。

これまで岡山市内の2、3小中学校を訪問して、学校教員の方に絵図を見てもらい意見をいただきましたが、「学校現場において学校教員が絵図を解読して、子どもたちのための指導指針を作成することは、地域の歴史について学術的・専門的な知識を習得した学校教員でない限り、相当の力量が必要だな」との意見が寄せられました。確かに、絵図の中には、昔の人が書いた難解な文字や表現があります。現在に残っている地名でも、昔の文字や書き方で書かれた文字は学校教員にとって理解しづらいでしょう。

そんな中で、絵図を上手に授業に活用している事例もあります。その事例を紹介したいと思います。岡山市立藤田第一小学校では、平成17年度と平成18年度に自分たちの小学校がある場所が江戸時代は児島湾の海であったことを子どもたちに発見させる授業を、慶長期から元禄期に作成された「備前国絵図」や干拓に関する絵図を用いて実践しました。授業では、子どもたちに絵図をみて気がついたことを、ポストイットに描いてもらい、絵図にペタペタと貼ってもらいながら、今と昔の児島湾の変化を学習するという構成で行いました。授業の中では、子どもたちが素朴な疑問を持ちながら、興味をもって絵図を観察していたのがとても印象的でした。

今年度は、平成18年12月3日（土）に岡山後楽園内にある鶴鳴館を会場として、子どもを対象とした「岡山後楽園発見ワークショップ」を行いました。このワークショップの目玉は、附属図書館で作成した「御後園絵図（御後園とは、現在の後楽園）」（文久3年）の約4.5メートル四方の巨大複製絵図の上をテクテクと歩いて、昔と今の違いや同じを参加者自身に発見してもらうことにあります。当日は、親子約20名の参加がありました。最初に、巨大複製絵図の上にあがってもらいじっくりと何が描かれているかを探してもらいました。絵図を始めて見る子供もいて、興味深そうに観察していました。その後、昔の後楽園がどのように使われていたかを紙芝居を使って、参加者に

後楽園のむかしに興味をもってもらうために動機づけを行いました。このあと観察方法を、スタッフとして参加してもらった岡山大学の学生に演技してもらい、小春日和の中、絵図とデジタルカメラをもって後楽園の同じところや違うところを探してもらいました。約1時間程度の発見タイムでしたが、子どもたちは実に多くの発見をして鶴鳴館に帰ってきました。デジタルカメラに記録した写真をカラープリンターで印刷して、発見の内容を書いてもらって、巨大絵図の上にマッピングしました。井田、唯心山、花葉の池や慈眼堂の辺りは、特に発見したことが多く貼られていました。例えば、「昔に比べて、井田の面積が減った」、「昔は鶴小屋だった場所が、今は木が植えてあった」、「絵図にはのっていない岩があった」など違いを参加者なりに発見した喜びを味わっていました。ワークショップの最後には、参加した子供たちにこのワークショップで何を学んだかを発表しました。今回は、短時間でしたが、今後ともワークショップを利用したこのような取り組みを継続していくことが大切であり、絵図の中に隠されている歴史をわかりやすく、参加者に興味をもって習得してもらえる手法であることを強く感じました。また、ワークショップが多くの人に支えられて実現することも体験してわかりました。地域の方々とも協力しながら、このようなワークショップを進めることも今後の課題として考えてみたいと思います。

最後に、今回のワークショップでは、岡山大学教育学部の赤木里香子先生、山口健二先生、大学院環境学研究科の小野芳郎先生、岡山後楽園の歴史と未来を考える会の神原邦男先生にそれぞれ専門的な観点からご助言・ご協力をいただきました。

(ほうじょう・みつとし 電子情報係長)



# マスカット

## 海外衛星放送受信設備を導入しました

2月から AsiaSat 社（香港）の放送衛星 ASIASAT-3S の無料放送を視聴できるようになりました。アジア、ヨーロッパ、米国及び中東を発信源とする世界の情報に接する場としてご利用ください。

<場所>

附属図書館中央館本館 2F

<利用方法>（ご自由に利用できます。）

1. 電源スイッチを押す。
2. チャンネルボタン（又は ）で選局し、音量ボタン（又は ）は低めに設定する。

<英語によるニュースのある主なチャンネル>

2ch	Bloomberg TV Asia-Pacific（米国の経済専門通信社による放送）
8ch	Al Jazeera English（カタールのニュース専門放送）
11ch	DW TV（ドイツ国営放送）
64ch	PTV World（Pakistan Television Corporation News & Current Affairs Channel）
74ch	CCTV 9（中国中央電視台 英文国際頻道）

<各国語による放送>（英語番組も含まれます。）

中華人民共和国	中国中央電視台、中国教育電視台など約 30 チャンネル
香港	Now Wireless Broadband、鳳凰網など約 4 チャンネル
インド共和国	Sahara Samay、Star Utsav など約 11 チャンネル
パキスタン・イスラム共和国	Pakistan Television など約 11 チャンネル
フランス共和国	フランス語圏の各放送局の番組による TV 5 Monde Asie など 3 チャンネル
ドイツ連邦共和国	ドイツ国営放送 DWTV の 1 チャンネル

## データベース講習会報告

下記のとおり開催し、多数の学生、教職員の方にご参加いただきました。

地区	講習会名称	開催月日	開催回数	参加人数
津島	Lexis.com	10月19日（木）	1	7
	Web of Science	10月20日（金）	2	40
	SciFinder Scholar	10月20日（金）	2	41
	LEX/DB インターネット	10月31日（火）	1	10
	ScienceDirect	11月9日（木）	1	11
鹿田	Web of Science	10月20日（金）	1	15
	医中誌 Web	11月8日（水）	2	46
	ScienceDirect	11月9日（木）	1	8
合計			11	178

### 自然史博物館まつりへの参加報告

平成 18 年 11 月 3 日（金）に倉敷市立自然史博物館主催の「第 6 回自然史博物館まつり」が開かれ、例年通り資源生物科学研究所も広報活動の一環として参加しました。分館では、貴重書である『Phytanthoza-iconographia』を使用して絵葉書を作り、ご来場の方々に配布しました。

この『Phytanthoza-iconographia』は、ドイツの薬種業者である J. W. Weinmann によって作られた植物図譜で、1737～45 年にかけて図版 4 冊、解説版 4 冊の全 8 冊が出版されました。分館ではこのうち図版 4 冊を所蔵しています。4000 種を越す植物が銅板刷手彩色によって精密に表現され、1025 枚に収められています。今回はこの中からぶどう、あおい、チューリップの 3 枚を選んで絵葉書にしました。

### 目録システム地域講習会（雑誌コース）が開催されました

平成 18 年 9 月 20 日（水）から 9 月 22 日（金）の三日間、中央館 AV 演習室（情報実習室）において目録システム地域講習会（雑誌コース）が開催されました。

これは、国立情報学研究所（以下 NII）と岡山大学附属図書館の共催で開催され、NII が提供する目録システムについて習得することを目的として行われるもので、「図書コース」「雑誌コース」があります。各コースとも東京会場、地方会場で年数回開催され、今回はこのうちの「雑誌コース」が開催されました。

この目録システムを通じて全国の大学図書館等参加館が共同作成する総合目録データベースは NII のホームページで「NACSIS Webcat」（URL <http://webcat.nii.ac.jp/>）として公開され、全国の大学図書館等の所蔵する資料を検索することができます。

受講対象は、この目録システムの参加機関で現在雑誌目録を担当されている職員の方で、今回は関東から沖縄まで、聴講 1 名を含む 31 名の方が参加されました。講師には当館職員 3 名に加え、NII および他大学から各 1 名の講師を迎え、計 5 名があたりました。受講者の方は日常業務としてすでにシステムを使われている方が多く、講習もスムーズに進み、三日間の日程を無事に終えることができました。

## 教員からの寄贈図書リスト

次の方々から著書をご寄贈いただきました。ありがとうございました。

### 中央館 教員業績コーナー（本館1階）に配架

今津勝紀 [大学院社会文化科学研究科]

「災害など緊急時における歴史遺産の保全に関する県内自治体等との連携事業」報告書

：岡山史料ネット（編） 今津勝紀，2006 (F709.1/S)

小山泰宏 [大学院社会文化科学研究科]

企業・事業・取引の評価手法の検討およびモデルの開発

：平成16-17年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書（研究代表者）

小山泰宏，2006 (F377.7/17-K)

酒井峰男 [留学生センター]

エピソードを話す：中上級用教材（著） 三恵社，2006 (810.7/S)

サイエンスを日本語で読む：中級前半用教材（共著） 三恵社，2006 (810.7/S)

谷 聖美 [大学院社会文化科学研究科]

アメリカの大学：ガヴァナンスから教育現場まで（著） ミネルヴァ書房，2006 (377.253/T)

中尾知代 [大学院社会文化科学研究科]

戦争の記憶に基づく日本イメージ形成：ジェンダー変数による分析

：日本軍に抑留された連合軍捕虜とその家族のオーラル・ヒストリー

：平成14年度-16年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）

研究成果報告書（研究代表者） 中尾知代，2006 (F377.7/16-N)

新納 泉 [大学院社会文化科学研究科]

「額田寺伽藍並糸里図」の現地比定試論（著） 新納泉，2005 (F377.7/18-N)

空間情報科学を用いた歴史学・考古学をはじめとする人文科学研究の推進（編著）

新納泉，2006 (F207/N)

シミュレーションによる人口変動と集落形成過程の研究（共著）

新納泉，2005 (F377.7/16-N)

「環境」と文化・文明・歴史

：岡山大学学内共同研究「自然と人間の共生」報告書（掲載論文著）

山口和子，2003 (519.8/K)

光本 順 [埋蔵文化財調査研究センター]

身体表現の考古学 = An archaeology of bodily representation（著） 青木書店，2006 (210.27/M)

（敬称略五十音順）

## 会議

### 学外

18.10.19 ~ 10.20

第 47 回中国四国地区大学図書館研究集会  
(於 松江テルサ)  
・ 学術情報の変容と大学図書館のマネージメント

10.26 ~ 10.27

第 92 回全国図書館大会岡山大会  
(於 岡山シンフォニーホール 他)

10.30

平成 18 年度国立大学図書館協会  
中国四国地区協会実務者会議  
(於 岡山大学附属図書館)  
・ 地域講習会、研修等のあり方について

11. 6

平成 18 年度中国四国地区  
国立大学図書館所管部課長会議  
(於 岡山大学附属図書館)  
・ 平成 18 年度国立大学図書館協会  
理事会等について、その他

11. 9 ~ 11.10

第 42 回日本医学図書館協会  
中国四国部会総会  
(於 高知パレスホテル)

11.14

平成 18 年度国立情報学研究所教育研修  
事業国際シンポジウム(西日本会場)  
(於 広島大学中央図書館)  
・ 求められる図書館サービスと  
スタッフ・ディベロップメント

### 学内

18. 9.28 平成 18 年度第 3 回附属図書館運営委員会

## 研修

- ・ 平成 18 年度目録システム講習会(雑誌コース)  
参加者 中山千佳子、山本裕見子(9.20 ~ 9.22)
- ・ 平成 18 年度総合目録データベース実務研修  
参加者 竹下 啓行(9.25 ~ 10.6)
- ・ 平成 18 年度大学図書館職員講習会  
参加者 大園 隼彦(10.17 ~ 10.20)

- ・ 平成 18 年度アーカイブズ・カレッジ  
(史料管理学研修会)短期コース  
参加者 藤原 智孝(11.13 ~ 11.24)
- ・ 平成 18 年度 NAIST 電子図書館学講座  
参加者 川上 研三(11.21 ~ 11.22)

### 編集委員会から

街角で呼ばれたと思って振り返ったら携帯電話だった。ということを経験しました。世は携帯時代。数年前までは思っても見なかった状況が出現しています。いつの時代にも言われることですが時代は変わる。図書館も時代の変化に敏感に反応し対応していくことが必要かと思われまます。ところで、季節はもうすぐ春。キャンパスにういういしい新入生を見かけるのも間近です。胸を膨らませてやってくる新入生たちはどのような大学図書館を想像しているのでしょうか。今号の「楳」も盛りだくさんで、図書館の実情をさまざまな方面からお伝えできるようになったと思います。今後ともこの「楳」がよき案内役として機能することができれば幸いです。

岡山大学附属図書館報「楳」 No.44 平成 19 年 2 月 28 日

発行人 藤森末雄 編集 広報誌編集委員会

岡山大学附属図書館発行 〒700-8530 岡山市津島中三丁目 1-1 電話 086-252-1111

ホームページ URL <http://www.lib.okayama-u.ac.jp/>